日本医史学雑誌　第68巻第3号（2022）　199–210

古代ギリシア・ローマにおける疾病観の変遷
――急性病・慢性病の疾病分類に関する考察――

福島　正幸

エジンバラ大学大学院博士課程（古典学）

受付：令和3年10月7日／受理：令和4年6月3日

要旨：本稿では古代医学における疾病分類，主に急性病と慢性病を取り上げ，それがどのように始まり，後世に受容されていったのかを分析した．ヒッポクラテース集典では分類の萌芽がみられるも，概念として明確に区分されるのはパリ写本無名作者やアレタイオスなど古代ローマ期に入ってからである．しかし，その初期段階においては急性病と慢性病の区別も曖昧で，とりわけ疾患部位という新しい概念が持ち込まれたことで熱病に関する混乱もみられる．これに対して，ガレーノスは従来の疾病分類と異なり，別の枠組みの中で全身性の熱病を捉えていたことを明らかにした．

キーワード：ヒッポクラテース集典，ガレーノス，急性病と慢性病，疾患部位，熱病

I. 序

本稿は，古代ギリシア・ローマにおける疾病観の変遷を，急性病・慢性病という疾病分類に着目して分析するものである．古代ギリシアにおける疾患の記述は，ヒッポクラテース集典に多数収められ，そこでは，600を超える疾患，症状，症候群が明確に区別されることなく記述されている．例えば，発熱は固有の疾患としても，個別の疾患の症状としても現れる．しかし，ヒッポクラテース集典の多くの著者たちは，疾患の個別記述よりも予後や治療を重視したため，体系的に疾患を分類するという視座に欠けている．以下で示すように，体系的な疾病分類が行われるのは，ローマ期においてであり，そこでは急性病・慢性病という二分類が大きな役割を担っている．古代ギリシア・ローマにおける疾病観を巡る従来の研究では，ヒッポクラテース集典およびガレーノスの記述分析が中心であり，その両者の間に位置する医学文書に関しては今もなおその重要性が看過されている．とりわけパリ写本無名作者やアレタイオスは，国内はもちろん，海外においても十分に研究がなされているとは言い難い．

そこで本稿では，まずヒッポクラテース集典における急性病について概観し，ローマ期の急性病と慢性病を扱った医学文書を取り上げる．具体的には，パリ写本無名作者，アレタイオス，ソーラノス（カエリウス・アウレリアーヌス）の著作における疾病分類と，ヒッポクラテース集典との関係について考察する．次いで，これらの疾病分類がローマ最大の医師ガレーノスによりどのように受容されたのか，とりわけ，古代医学史の重要な転換点である疾患部位という概念，そしてそれと熱病との関係に焦点を当てて，疾病観の変化を辿る．

II. ヒッポクラテース集典における疾病分類

古代医学文書における疾病観の変遷を探る上で，最も重要な医学文書はヒッポクラテース集典（Corpus Hippocraticum以下CHと略す）である．これはヒッポクラテースやその弟子を中心に書かれた60余編の著作の集合体を指し，その著作の大部分は前5世紀に成立している．CHには無数の症状・疾患が記述されているが，疾病分類の基準と

もなる病気のカテゴリーについての理解は，現代とは大きく異なる様相を呈している．例えば，「疫病」[1]や「流行病」[2]という概念の下に個別の疾患が分類列挙されるということもなければ，後述のように急性病・慢性病という分類を用いて疾患が整理されることもない．

CHで疾病分類を扱った著作には，『疾患について（*Aff.*）』，『内部の疾患について（*Int.*）』，『疾病について（*Morb.*）』第1–3巻があり，このうち『疾患について』，『内部の疾患について』，『疾病について』第2巻，第3巻は「頭から踵へ *a capite ad calcem*」という順序で疾患を記述している[3]．しかし，これらは厳密には疾病分類というより，一つの疾患をいくつかの種類に分化させた疾患の列挙に過ぎず，ある疾患を特定のカテゴリーのもとに分類するというものではない．例えば，『内部の疾患について』では，プティシス〔労咳〕（φθίσις）という肺の疾患が，三種類に分けられている[4]．このような傾向に対しては，古来より批判があり，『急性病の摂生法（*Acut. A*）』の著者は，過度な疾患の細分化を行なったクニドス派の医師たちを批判している[5]．CHで唯一疾患のカテゴリーとして認識されていたのは「急性病[6]」という枠組みであり，例えば『急性病の摂生法』では次のように書かれている．

> CH『急性病の摂生法』第5章〔Littré II（1840）234 = Joly（1972）37. 18–38. 1〕
> 「私がとりわけ称賛したいのは，多くの人々を死なせる急性病に関して，他の者たちを凌ぐ医師である．急性病というのは，古来の者たちがプレウリーティス〔胸膜炎〕，ペリプレウモニアー〔肺周囲炎〕，プレニーティス〔脳心炎〕，カウソス〔燃炎熱〕と名付けたもの，そして他のこのようなもののうち，一般に発熱が持続するものである[7]」

さまざまな医師たちの手で書かれた著作の集合体というCHの性質上，すべての著作で一致する訳ではないが，プレウリーティス，ペリプレウモニアー，プレニーティス，カウソスと呼ばれる四つの疾患は急性病というカテゴリーのもと認識されていたことがCHの他の著作からも窺える[8]．また，『予後（*Prog.*）』という著作は，急性病の予後を詳述した作品であるが，著者は急性病の種類について言及していない．それはこの著者が一般人ではなく医師という専門家を読者として想定し，どの疾患を急性病とするのかは医師にとって自明で，再定義する必要がないと考えたためである[9]．したがって，少なくとも紀元前5世紀には「急性病」という名称のもといくつかの疾患が捉えられ，医師間ではある程度のコンセンサスが形成されていたといえる．

なお，ここで列挙されている疾患は，現代の病名と一致していないことに注意が必要である．すなわち胸膜炎と訳出したプレウリーティス（πλευρῖτις）は，側胸部や肋骨を意味するプレウラ（πλευρά）に由来する病名であるが，紀元前5世紀には胸膜は発見されておらず，現代医学用語の胸膜炎 pleurisy ないし胸膜 pleura とはそれぞれ別物である[10]．つまり，この疾患は当初，側胸部に症状を強く感じるということから命名されたのであり，「胸膜炎」というよりは「側胸炎」というような意味であったと考えられる．

同様に，肺周囲炎と訳出したペリプレウモニアー（περιπλευμονία）[11]は，ペリ（περί）〔周囲〕とプネウモーン（πνεύμων）〔肺〕から成る合成語で，現代の肺炎 pneumonia とは異なる．CHにおけるプレウリーティスとペリプレウモニアーは，罹患部位が側胸部の片側か両側かを基準に区別するものもあるが，共に漠然と肺の疾患を指していることが多く，両者では酷似した症状が記録されている[12]．

脳心炎と訳出したプレニーティス（φρένιτις あるいは φρενῖτις）は，横隔膜を意味するプレーン（φρήν）に由来するが，必ずしも横隔膜の炎症を示すものではない．ギリシア語のプレーンは横隔膜のみならず，感覚・知覚を司ると考えられていた場所を漠然と指しており，これに由来するプレニーティスはプレーンの疾患という意味であった．そのため，プレーンが頭にあると考えるか，横隔膜にあると考えるかによって著者の記述は

異なる．CHでは脳の異常と関連付けられるものもあれば[13]，横隔膜と結びつきの強い記述も存在する[14]．

燃炎熱と訳出したしたカウソス（καῦσος）は，「燃やす（καίω）」という動詞から派生した病名で，燃えるような発熱を疾患の一症状ではなく，個別の疾患として捉えていることに注意する必要がある．

古代の疾病概念を理解する上で特に注意を要するのは，CHでは「急性病」と対立する「慢性病」という概念は確立されていないということである[15]．「急性病」の「急性」はギリシア語でオクシュス（ὀξύς）といい，この形容詞には「急性」の他，「鋭い」「激しい」「酸い」など様々な意味が包含されている．したがって，発熱と結びつけば急性発熱以外にも，激しい熱，すなわち高熱を意味しうる．実際，CHで「急性病」に掲げられた病気はすべて致死率の高さを特徴としており，オクシュス（ὀξύς）という原語の持つ意味の広さに留意すべきである．またCHで「急性」という表現に用いられたギリシア語はオクシュス（ὀξύς）一種類であるのに対して，反対語としての「慢性」という表現は多岐に渡り，「長い（μακρός）」「長期間の（χρόνιος）」「非常に長期間の（πολυχρόνιος）」などが用いられている[16]．しかもこれらは疾患によって生じる症状の長さを形容したもので，「慢性病」というカテゴリーとしての総称に用いられているのではない．ただし，CHの中でもごく一部の作品，例えば『箴言（*Aph.*）』には，罹患期間に着目して「急性」と「慢性」という語を対置させた例も確認され[17]，CHの一部の著作には急性病と慢性病という分類の萌芽をみることもできよう．

III. 急性病と慢性病

「急性病」と対立する概念としての「慢性病」が明確に医学文書に現れるのは，ローマ期に入ってからのことであり，前述のCHに含まれる疾病分類を扱った著作群とは少なくとも数世紀の隔たりがある．このような二分法のもとに個別の疾患を割り当て記述した著者には，パリ写本無名作者（1世紀），アレタイオス（1世紀），アルキゲネース（1世紀），エペソスのソーラノス（1–2世紀）が挙げられる．

通称パリ写本無名作者Anonymus Parisinusは，紀元後1世紀の医師であるとされるが，人物の詳細は不明である．この無名氏の手による『急性病と慢性病について』という医学文書は，パリ写本に初めて写しが見つかったことから，作者もこのように呼ばれている．この文書は同僚医師のために書かれたハンドブックのような覚書で，古来の医師たちの証言を学説誌的に記したものでもあり，各疾患の原因・症状・治療が簡潔にまとめられている[18]．かつてこの医学文書はテミソーンあるいはヘーロドトスによって書かれた文書だと推定されたこともあるが，現在ではどちらも否定されている[19]．

アルキゲネースは『急性病の病徴候』『慢性病の病徴候』を[20]，ソーラノスは『急性病と慢性病』を執筆したとされるが，両者とも原本は散逸している．しかし，ソーラノスのギリシア語原典はカエリウス・アウレリアーヌスによってラテン語に翻訳される形で現存している．ただし，これはソーラノスの著作を一語一句翻訳したものではなく，カエリウスによる再編集が施されたことも分かっており[21]，どこまでがソーラノスの原文に相当する記述で，どこからがカエリウス自身の記述なのか判定が困難である．また，カエリウスは，5世紀頃に活躍していた経験学派の医師であると推定されているが，詳細は杳として知られない[22]．アレタイオスもまたローマ期の医師であると推定されているが，生没年代に関しては特に議論がある．紀元後1世紀半ばに活躍した医師であるという学説が有力説である[23]．『急性病と慢性病の原因と徴候』全4巻，『急性病と慢性病の治療』全4巻を著し，その大部分が現存している．

ここでそれぞれの著者について急性病と慢性病に分類された疾患の数をみてみると，パリ写本無名作者では16の急性病，35の慢性病（表1），さらに，一部テクストが散逸しているが，アレタイオスでは22の急性病，28の慢性病（表2），カエリウス（ソーラノス）では14の急性病，40以

表1　パリ写本無名作者

急性病	慢性病	
1）脳心炎 φρένιτις	17）眩暈 σκοτωματικοί	35）膵臓炎 σπληνὸς φλεγμονή
2）嗜眠 λήθαργος	18）狂気 μανία	36）膵臓硬化 σπληνὸς σκίρρος
3）癲癇 ἐπιληψία	19）憂鬱症 μελαγχολία	37）腎臓病 νεφριτικοί
4）卒中 ἀποπληξία	20）狂信症 ἐνθεαστικοί	38）膀胱出血 κύστις αἱμορραγοῦσα
5）頭痛 κεφαλαία	21）麻痺 παράλυσις	39）膀胱潰瘍 κύστεως ἕλκωσις
6）咽頭痛 συνάγχη	22）嗅覚麻痺 παράλυσις ὀσφρήσεως	40）膀胱麻痺 κύστεως παράλυσις
7）痙攣 σπασμός	23）犬性麻痺 κυνικὸς σπασμός	41）未消化下痢 λειεντερία
8）胸膜炎 πλευρῖτις	24）嚥下麻痺 παράλυσις καταπόσεως	42）赤痢性流出 ῥευματισμὸς δυσεντερίας
9）肺周囲炎 περιπνευμονία	25）散瞳・眼球癆 μυδρίασις καὶ φθίσις	43）赤痢 δυσεντερία
10）失神 συγκοπαί	26）吐血 αἱμοπτυικοί	44）悪性症 καχεξία
11）過食症 βούλιμος	27）労咳 φθίσις	45）水腫 ὕδρωψ
12）恐水症 ὑδρόφοβος	28）体液流下 κατάρρος	46）渋り便 τεινεσμός
13）胆汁流出 χολέρα	29）膿胸 ἐμπυϊκοί	47）精液漏 γονόρροια
14）腸閉塞 εἰλεός	30）萎縮症 ἀτροφία	48）関節炎 ἀρθρῖτις
15）結腸炎 κωλικοί	31）喘息 ἆσθμα	49）坐骨炎 ἰσχιάς
16）色情症 σατυρίασις	32）肝臓炎 ἥπατος φλεγμονή	50）痛風 ποδάγρα
	33）黄疸 ἴκτερος	51）象皮病 ἐλεφαντίασις
	34）肝臓硬化 ἥπατος σκίρρος	

上の慢性病が列挙されており（表3），CHと比べて急性病に分類された疾患の数は大きく増加している．

カエリウスの証言によれば，慢性病の記述は経験学派のテミソーンによって創始されたとされるが[24]，テミソーンの著作はすべて散逸しており，確かな論拠となる資料に乏しい．経験学派のもとで慢性病の治療が本格化し，ソーラノスで頂点に達したというのが通説であり，慢性病が広く記述されるようになった背景には，社会階層の変化，すなわち経済的に裕福になった市民がより治療を受けられるようになったためであるとも指摘されている[25]．

パリ写本無名作者によって急性病として列挙された病気の記述をみてみると，例えば12章に記述された恐水病（ὑδρόφοβος）には，罹患者が音を聞くのも恐れるほど水分を嫌がり，飲物が供されると叫ぶほどに忌避するという現在の恐水病（狂犬病）の症状とかなり近いものが記述されている．したがって，CH同様，急性病には致死率の高い疾患が掲げられている．しかし，必ずしも致死率と結びついていない疾患もこれに分類されており，例えば，11章で取り上げられた過食症（βούλιμος）には，致命的な症状が記録されていない[26]．したがって，ここにCHの「急性病」概念とのずれが生じている．さらに，脳心炎，胸膜炎，肺周囲炎についてはCHの分類を踏襲し，急性病に列挙されているが，燃炎熱という特殊な熱病は急性病・慢性病両方のリストから除外されている．これについては現存する中世写本が不完全で正しく原本を伝えていないという可能性も否定できないが，同じくカエリウスでも燃炎熱は除外されている．

図中で便宜的に付した日本語の病名が必ずしも古来の病名と一致していないことは，CHと同様であるが[27]，解剖学的な理解が進んだことで，CHと同じ病名を用いていても，記述された疾患の概念に変化が生じている．例えば，CHにおける胸膜炎は胸膜と関係のないものであるとすでに指摘したが，パリ写本無名作者は胸膜を表現する際に，「肋骨を下から補強する膜」という前3世紀の解剖学者エラシストラトスが用いたのと同じ表現を引用し，プレウリーティスはこの膜の炎症であると定義している．その意味では今日理解されている胸膜炎に近く，疾病概念が変化していることが窺える[28]．

表2　アレタイオス

急性病	慢性病
第一巻	第三巻
1）脳心炎 φρενιτικοί 〔散逸〕	1）頭痛 κεφαλαίη
2）嗜眠 ληθαργικοί 〔散逸〕	2）眩暈 σκοτωματικοί
3）枯渇症 μαρασμός 〔散逸〕	3）癲癇 ἐπιληψίη
4）卒中 ἀποπληξίη 〔散逸〕	4）憂鬱症 μελαγχολίη
5）癲癇発作 παροξυσμός ἐπιληπτικῶν	5）狂気 μανίη
6）硬直 τέτανος	6）麻痺 παράλυσις
7）咽頭痛 συνάγχη	7）労咳 φθίσις
8）口蓋垂の疾患 τὰ κατὰ τὴν κιονίδα πάθεα	8）膿胸 ἐμπυϊκοί
9）口峡の潰瘍 τὰ κατὰ τὰ παρίσθμια ἕλκεα	9）肺膿瘍 αἱ κατὰ τὸν πνεύμονα ἀποστάσεις
10）胸膜炎 πλευρῖτις	10）喘息 ἄσθμα
第二巻	11）肺病 πνευμώδεα
1）肺周囲炎 περιπνευμονίη	12）肝臓（* の慢性疾患）ἧπαρ
2）吐血 αἵματος ἀναγωγή	13）膵臓（* の慢性疾患）σπλήν
3）失神 συγκοπή	14）黄疸 ἴκτερος
4）燃炎熱 καῦσοι	15）悪性症 καχεξίη
5）胆汁流出 χολέρη	第四巻
6）腸閉塞 εἰλεός	1）水腫 ὕδρωψ
7）肝臓の急性疾患 τὰ κατὰ τὸ ἧπαρ ὀξέα πάθεα	2）尿崩症 διαβήτης
8）空静脈の急性疾患 ἡ κατὰ τὴν κοίλην φλέβα ὀξεία νοῦσος	3）腎臓の（* 慢性）疾患 τὰ κατὰ τοὺς νεφροὺς παθέα
9）腎臓の急性疾患 τὰ κατὰ τοὺς νεφροὺς ὀξέα πάθεα	4）膀胱の（* 慢性）疾患 αἱ ἐν τῇ κύστει νοῦσοι
10）膀胱の急性疾患 τὰ κατὰ τὴν κύστιν ὀξέα πάθεα	5）精液漏 γονόρροιη
11）子宮窒息 ὑστερικὴ πνίξ	6）胃の（* 慢性）疾患 στομαχικοί
12）色情症 σατυρίησις	7）腹部悪性状態 κοιλιακὴ διαθέσις
	8）結腸炎 κωλικοί
	9）赤痢 δυσεντερίη
	10）未消化下痢 λειεντερίη
	11）子宮の（* 慢性）疾患 ὑστερικοί
	12）関節炎と坐骨炎 ἀρθρῖτις καὶ ἰσχιας
	14）象皮病 ἐλέφας

またアレタイオスは，CHの伝統を継承し，胸膜炎，肺周囲炎，燃炎熱の三種を急性病に分類するが[29]，パリ写本無名作者とは異なり，癲癇・頭痛・結腸炎を慢性病に分類し，吐血を慢性病ではなく急性病に分類している[30]．さらに，肝臓・腎臓・膀胱の疾患は急性とそうでないものに分けられ，分類が細分化している．さらに急性・慢性の区別も単に致死率や罹患期間を基準とするのではない．それが分かる二つの慢性病の記述を引用する．

アレタイオス『急性病と慢性病の原因と徴候』第4巻7章〔Hude（1958）74. 30–75. 1〕
「この病気（* 腹部の悪性状態）は非常に長引く致命的な禍である．一旦治まったように見えても，明らかな原因もなく再発し，わずかな過ち

表3 カエリウス・アウレリアーヌス

急性病	慢性病	
第一巻	第一巻	第四巻
脳心炎 phrenitis	頭痛 cephalaea	象皮病 elephantiasis
第二巻	眩暈 scotomatica passio	虱病 phthiriasis
嗜眠 lethargus	癲癇 epilepsia	腹部疾患 coeliace
強硬症 catalepsis apprehensio vel oppressio	狂気 mania	腹部衰弱 ventris debilitas
胸膜炎 pleuritis	憂鬱症 melancholia	腹部の腫れ・硬直・ガス・炎症・拍動 ventris tumor ac duritia et ventositas, inflatio ac saltus
肺周囲炎 peripneumonia	第二巻	
心臓炎 cardia passio	麻痺 paralysis	赤痢 dysenteria
咽頭痛 synanche	犬性痙攣 cynikos spasmos	結腸炎 colicae passiones
卒中 apoplexia	耳痛と耳腔への体液流下 auriculae dolor atque humoris fluor per auditorias cavernas	回虫病 lumbrici
痙攣と硬直とその類種 conductio et distentio et earum species		女性化症 malthacoi
恐水症 hydrophobia	失声症 phones apocope	第五巻
腸閉塞 ileos*	体液流下 catarrhos	坐骨痛と腰筋炎 ischia, psoiai
色情症 satyriasis	咳 tussicula	関節炎と痛風 arthritis, podagra
胆汁流出 cholerica passio	出血 sanguinis fluor	腎臓疾患 nephritis
下痢 diarrhoia	労咳 phthisis/phthoe	慢性膀胱疾患 tardae vesicae passiones
	第三巻	尿崩症 diabetes〔* 散逸〕
	呼吸困難あるいは喘息 suspirium sive asthma	精液漏 gonorrhoia
	胃疾患 stomachica passio	夢精 oneirogmos
	多食症 phagedaena	精管衰弱 debititas seminalium viarum
	肝臓・膵臓疾患 epaticos, splenicos	プリアーポス ** 症（持続性勃起症）priapismos
	黄疸 icteros	膿胸 empyemata
	悪性症 cachexia	肥満 polysarkia
	萎縮症 atrophia	
	水腫 hydrops	

* カエリウスがギリシア語で言及している病名についてはそれを優先した．例）acutum tormemtum 急性痛→ ileos 腸閉塞
** プリアーポスはギリシア神話における豊穣の神であり，しばしば生産力の象徴である男根で表される．

でも再発する．そのため，これは定期的にやってくる．」

この腹部悪性状態（κοιλιακὴ διάθεσις）と名付けられた疾患は，「長引く」というのを特徴としており，慢性病に分類された理由が理解しやすい．そして，アレタイオスは急性・慢性の分類に際して，致死率の高さという基準を採用していないことも分かる．しかし，別の疾患，尿崩症（διαβήτης）の記述を見てみると次のように記されている．

アレタイオス『急性病と慢性病の原因と徴候』第4巻2章〔Hude（1958）65. 21–23〕
「この病気の性質は慢性的であり，形をなすのに長時間かかる．しかし，病気の状態が完成されると，患者はすぐに命を落とす．消耗は急性で，すぐに死亡する．患者の生涯は惨めで苦痛に満ちている[31]．」

ここで述べられている尿崩症とは，肉質や四肢が尿に溶け出すことで大量の尿が出ると考えられている疾患である[32]．そして，この疾患の罹患期間自体は非常に短く，患者はすぐに死ぬという，むしろ急性病に近い特徴が述べられている．それにも関わらず，アレタイオスがこの病気を慢性病に分類しているのは，この病気が発病するまでに時間がかかるという点に着目し，罹患期間を症状が現れる間に限定せず，それ以前の過程も含め，時間的な幅を持たせているからである．したがって，ここでも慢性病の「慢性」の意味にも揺らぎがあることが窺える．

IV. 疾患部位と消えた急性病「燃炎熱」

前章で論じた急性病・慢性病の著者たちは，CHでも確認される「頭から踵へ *a capite ad calcem*」という順に疾患を記述している．前述のように，このような記述の仕方はCH中『疾病について』，『内科疾患について』でも確認できるが，決して一般的なものではない．では，急性病・慢性病を記録した医師たちは，なぜこのような配列による記述方式を採用するようになったのだろうか．

この問題を考えるにあたっては，この時代に起きたもう一つの重大な転換に目を向けねばならない．それは疾患部位という発想の導入である．CHに含まれる疾病分類を扱った著作では，胆汁や粘液の不調和が病気の原因であるとされていたのに対して，ローマ期の医師たちは個々の病気の原因を身体全体に由来する体液にではなく，罹患した身体の部位に求めるようになった．

ガレーノスによれば，このような考え方はエラシストラトスに始まるとされる[33]．エラシストラトスは紀元前3世紀にアレクサンドリアで活躍した解剖家であり，この地では人体解剖が盛んに行われたことで，人体構造に対する理解が飛躍的に進んだ[34]．疾患部位という発想もこうした解剖学的な発展を背景に生み出されたものの一つである．疾患部位という身体の部位に焦点を当てた考え方が広まるにつれて，分類の仕方もまた変化している．

例えば，CHではプレニーティスが，頭部の疾患か横隔膜の疾患か著者によって若干の揺らぎがあったのに対し，パリ写本無名作者およびカエリウス（ソーラノス）は急性病の第一の疾患として挙げている．また，パリ写本無名作者は，この病気の疾患部位がどこに同定されていたのか古来の四人の医師の学説を紹介しており，それによれば，エラシストラトスは髄膜の機能の疾患，プラクサゴラスは心臓の炎症，ディオクレースは横隔膜の炎症，ヒッポクラテースは脳および髄膜の障害と定義していたとされる[35]．ここで引用されたヒッポクラテースの学説は，実際のCHの記述と整合性のあるものではないが，少なくとも1世紀には各医学者の学説が疾患部位の同定を基準に整理され，プレーン（φρήν）という思考を司る場が身体のどこにあると考えられていたのかを知る手がかりとなる．パリ写本無名作者自身は，学説の差異を紹介した上で，この疾患を「頭から踵へ *a capite ad calcem*」の順に疾患を列挙したリストの最初に挙げていることから，この疾患を頭部（脳ないしは髄膜）と結び付けていたのは明らかである．同様に，アレタイオスもプレニーティスを急性病の第一の疾患に挙げており，疾患部位が

脳だと考えていたことが窺える．

さらに，燃炎熱という熱病がパリ写本無名作者およびカエリウス（ソーラノス）のリストに加えられていないということに触れたが，それはまさしくこの疾患部位という発想と関連があると考えられる．つまり，このような全身性の熱病については，疾患部位が同定できず，部位別に沿った記述が著しく困難だからである．実際，CHには三日熱や四日熱など多様な熱病が登場するのに対して，急性病・慢性病を記述した著者たちは，アレタイオスを除けば，熱病を急性病・慢性病に分類していない．著作は散逸しているが，ソーラノスは『急性病と慢性病』の他，『熱病について』という著作を記したとされており[36]，燃炎熱はこちらで扱われた可能性がある．アレタイオスにおいて，燃炎熱は肺の疾患（胸膜炎・肺周囲炎）の後，腸の疾患（胆汁流出・腸閉塞）の前に置かれているが，それはこの疾患が「とりわけ内部」に熱を感じ，「呼吸が熱くなる」という胸部という症状や，「腹部の大部分が乾燥する」という腹部の症状を伴うからである[37]．しかし，アレタイオス自身もこの疾患では全身のあらゆる場所に症状が現れることを認めており，身体のどの部位に疾患の原因があるのか明確には論じていない．

古代において最も多くの医学書を記述したガレーノスもまた急性病・慢性病という分類を完全に放棄した訳ではなく，『ヒッポクラテース「急性病の摂生法」注解（*HVA.*）』第2巻で，「先に胃へ飲み込まれた余剰物を排出するのは容易なことでない．急性病では特にそうである」と述べている[38]．この態度は急性病という用語を自明なものとして用いて，それに属する個別疾患を列挙しなかったCHの『予後』の著者と共通する姿勢である．さらに，『ヒッポクラテース「箴言」注解（*Hipp. Aph.*）』では「というのも，病気が超急性（κάτοξυ）であれ，急性であれ，慢性であれ，病気が極期へ達したときには，その状態を吟味することができる」と述べ[39]，急性・慢性の他に超急性という分類を付加している．この三つの分類にどのような病気をそれぞれ想定しているのか明らかにする唯一の記述は次のものである．

ガレーノス『ヒッポクラテース「箴言」注解』〔Kühn（1829）XVII B. 384. 14–385. 1〕

「プレウリーティス〔胸膜炎〕，ペリプネウモニアー〔肺周囲炎〕，プレニーティス〔脳炎〕は急性病，シュナンケー〔咽頭痛〕，キュナンケー〔咽頭炎〕，コレラー〔胆汁流出〕，テタノス〔硬直〕は超急性病，ヒュデロス〔水腫〕，メランコリアー〔憂鬱症〕，エンピュエーマ〔膿胸〕，プトエー〔労咳〕は慢性病である．」

膨大に存在するガレーノスの記述は，ときに著作間で矛盾することがあり，別の著作でキュンナケーとシュナンケーは同じであるとも述べられているが[40]，急性病の分類に関してはCHを踏襲している[41]．ただし，ガレーノスは急性病と慢性病の分類を無視している訳ではないが，テーマとしてこれを扱った著作はなく，このような単純な二分法を積極的に採用していない．

さらに特筆すべきは燃炎熱の不在である．ガレーノスの分類では，燃炎熱がパリ写本無名作者やカエリウスと同様，急性病・慢性病いずれのカテゴリーにも挙げられていない．ガレーノスは，熱病について『熱病の種類について（*Dff. Feb*）』という個別著作を記しており[42]，そこではCHの『人間の自然性について（*Nat. Hom.*）』，『流行病（*Epid.*）』第6巻の記述をもとに議論を展開している[43]．この著作でガレーノスは，熱病を持続熱・毎日熱・三日熱・四日熱の四つに分類して論じているが，この記述は，胆汁の質によってそれぞれの熱病を区別したCHの『人間の自然性について』15章の記述に大きく依拠している[44]．また，ガレーノスは同書で「三日熱や燃炎熱と同じように，四日熱や真正毎日熱でも，苦胆汁（*黄胆汁）が集まっていると考えるのは馬鹿げている」と述べ[45]，『人間の自然性について』の理論を継承しながら，黒胆汁由来のものと黄胆汁由来のものを区別し，原因となる体液に着目した熱病の分類を行う．燃炎熱が他の熱病である毎日熱・三日熱・四日熱・半日熱と同列に列挙されていることからも[46]，急性病というカテゴリーではなく，熱病の一形態として分類しているのは明らかである．

また，ガレーノスの著作において，燃炎熱は疾病分類を扱った著作（『疾病の原因について（*Caus. Morb.*）』，『疾病の種類について（*Diff. Morb.*）』，『症状の原因について（*Caus. Symp.*）』，『症状の種類について（*Symp. Diff.*）』）でもほとんど言及がないことから，これは熱病に特化した枠組みの中に位置づけられ，それまでの疾病分類とは異なる様相を呈していることが窺える．

V. 結　語

本稿では古代医学における疾病分類規範である急性病と慢性病を取り上げ，それがどのようにCHで創始され，その後ローマの医師たちに受容されていったのかを分析し，古代ギリシア・ローマにおける疾病観の変遷を辿った．CHでは急性病・慢性病という分類の萌芽がみられるが，慢性病というカテゴリーが確立はしていないことを確認し，古代ギリシア語の病名と現代の医学用語の病名では概念そのものに大きな差異があることを指摘した．

急性病・慢性病という二分法で病気の分類を行うようになったのはローマ期の医師たちであり，本稿IIIでは，そのうちパリ写本無名作者，アレタイオス，カエリウス・アウレリアーヌス（ソーラノス）に焦点を当てた．それぞれの著者の記述を分析することで，ヒッポクラテース的な伝統の継承と各医学作家の独自性が那辺に存するのか明らかにした．

またIVでは，急性病・慢性病という分類に際して，疾患部位という新しい概念が持ち込まれたことで，カウソス〔燃炎熱〕と呼ばれる特殊な熱病の位置付けに問題が生じていることを取り上げた．そしてアレタイオスにおいては新旧概念の融合による混乱がみられることを指摘した．これに対してガレーノスは，全身性の熱病を疾患部位あるいは疾患部位に沿った従来の疾病分類という枠組みの中で捉えず，カウソスを熱病分類の中で規定していたことが窺える．

注

* 本稿で引用するギリシア語・ラテン語の翻訳はすべて筆者による．各医学文書の参照箇所に関しては，古代医学史研究の国際的な慣例にしたがって，現在研究者が標準的に用いる校訂本の頁数・行数を，ヒッポクラテース集典とガレーノスについてはLittré版，Kühn版の各頁数・行数を合わせて明記した．また各著作の邦題については，他の日本語の出版物との異同から生じる混乱を避けるため，初出の箇所にヒッポクラテース集典はCraik（2015），ガレーノスはNutton（2020）の定めるラテン語による略語を括弧書きした．また，ギリシア語のカタカナ表記にあたっては，φ, θ, χ とπ, τ, κ を区別せず，音引きを省略しない．古代ギリシア語の病名については特段の事情のない限り，イオニア方言形ではなくアッティカ方言形で言及した．

1）この疫病を意味するロイモス（λοιμός）という語は，CH中で『風気について（*Flat.*）』を除いて現れない．

2）「流行病」とも訳されるエピデーミアー（ἐπιδημία）は本来「滞在」を意味するギリシア語であり，病気がある地域に「滞在」するという意味と，遍歴医たちが各地に「滞在」するという二重の意味が込められているCraik（2005: 64）．

3）例えば，『疾病について（*Morb.*）』第2巻，『疾患について（*Aff.*）』は，頭部（*Morb.* II 1-37, *Aff.* 2, 4, 5），上腹部（*Morb.* II 44–65, *Aff.* 6, 7, 9, 10, 11, 12），下腹部（*Aff.* 14–28），下肢（*Aff.* 29–31）の順で記述している．このような配列による記述はメソポタミア，エジプトに由来するとされる．Di Benedetto（1989: 91），Roselli（2018: 181）参照．

4）『内部の疾患について』10–12章〔Littré（1840）VII 188. 26–198. 24 = Potter（1988）102. 7–114. 19〕参照．なお，φθίσις はφθίνω「消耗する」「衰える」という動詞に由来する名詞で「消耗」を意味する．そのため英訳ではconsumptionと訳されることが多い．

5）『急性病の摂生法』3章〔Littré（1840）II 226. 11–228. 6 = Joly（1972）37. 4–10〕参照．

6）「急性病」の原語はὀξεῖαι νοῦσοι，ὀξέα νοσήματα，ὀξέα πάθεα 等があり，「急性」を示す形容詞は同じであるが，「病」については異なる言い方がされている．

7）この著作を伝える10世紀の最古写本Marcianus 269ではプレニーティスの後に，レータルゴイ〔嗜眠〕（λήθαργοι）が続いているが，一般に後代の挿入とみなされている．Joly（1972: 37）参照．

8）『空気，水，場所について（*Aer.*）』3章〔Littré（1840）II 18. 7–9 = Jouanna（1996）191. 6–8〕，『疾患について』6章〔Littré（1849）VI = Potter（1988）14. 8–9〕参照．

9）Jouanna（2013: xv）参照．

10）なおこの胸膜を初めて発見したのはアレクサンドリアの解剖学者エラシストラトスであるとされる．

Garofalo（1988: 126–127）参照.

11）正確にはペリプレウモニアー（περιπλευμονία）のイオニア方言形ペリプレウモニエー（περιπλευμονίη）であるが，本稿では混同を避けるため，より一般的な形ペリプレウモニアーで言及する．この他にも，後述のガレーノスで用いられるペリプネウモニアー（περιπνευμονία）という別形も存在する．

12）Craik（1998: 153）参照．その他にも，片方の肩か両方の肩かという区別もみられる『疾病について』第1巻26章〔Littré（1849）VI 194. 6 = Wittern（1974）78. 7〕，同27章〔Littré（1849）VI 195. 22–23 = Wittern（1974）80. 6–7〕参照．なおギリシア語の英訳としてpleurisy，pneumoniaが用いられることがあるが，近年はその概念の差異に着目しpleuritis，peripleumoniaと文字転写するのが主流となっている．

13）『神聖病について（*Morb. Sacr.*）』17章〔Littré（1849）VI 392. 4–15 = Jouanna（2003）30. 3–17〕参照．φρένιτιςの研究は，Di Benedetto（1986）；Byl and Szafran（1996）；McDonald（2009）；Thumiger（2017）；Thumiger and Singer（2018）参照.

14）『疾病について』第3巻〔Littré（1851）VII 116. 5–6 = Potter（1988）18. 20–21〕参照.

15）同様の指摘をなすものとしてKudlien（1967: 64–65）；Potter（1990: 252）；Jouanna（1996: 53）；Jouanna（2013: 4）；Roselli（2018: 183）参照.

16）例えば，χρόνιοςおよびπολυχρόνιοςの用例分析についてはFukushima（2020: 12）参照.

17）『箴 言』1巻4章〔Littré（1844）IV 460. 7–8 = Jones（1931）100. 9–11〕，同4巻23章〔Littré（1844）IV 510. 5–8 = Jones（1931）140. 3–6〕参照.

18）この文書は1840年に発見され，1894年にロバート・フックス（Robert Fuchs）が校訂版を出版した．しかし，フックスはパリ諸写本を元に校訂本を作成したため著作としては不完全な形であった．その後ロンドン写本（Londiniensis Wellcomensis 52b）にこの作品の写しが見つかり，シエナ大学のイヴァン・ガロファロ（Ivan Garofalo）教授が，この写本とParisinus suppl. gr. 636，Parisinus gr. 2324，Vindobonensis med. gr. 38の計4写本すべてを校合し，全編を収める完全な形での初の校訂本を作成した．本稿の底本はGarofalo（1997）の校訂本を使用した.

19）Fuchs（1903）はテミソーン，Wellmann（1905; 1913）はヘーロドトス（歴史家とは別人）と同定し，ギリシア語辞典として最も標準的なLSJ（H. G. Liddell & R. Scott（rev. H. S. Jones & R. McKenzie）*A Greek-English Lexicon, 9th edition with Revised Supplement*. Oxford）ではWellmannの見解が引き継がれているが，現在ではいずれの説も否定されている.

20）アルキゲネースの散逸作品についてはMavroudis（2000: 82–8）参照.

21）カエリウスの再編集については，Urso（1997）参照.

22）カエリウスの底本はBendz（1990/1993）の校訂本を使用し，Drabkin（1950）も参照した.

23）Kudlien（1963: 14–24）；Oberhelman（1994: 958）；Nutton（2013: 210）参照．Deichgräber（1971）はそれよりもやや早い時期を想定する．アレタイオスはHude（1958）のテクストを使用した.

24）カエリウス『急性病と慢性病』第5巻序文〔Bendz（1990）426. 25–26〕参照.

25）Garofalo（1997: viii n. 14）参照.

26）Garofalo（1997: 80–82）参照．多食症（βούλιμος）は「牛（βοῦς）」と「飢餓（λιμός）」に由来する病名である．牛のような食欲が患者に生じることからこのように名付けられたものと思われる.

27）例えば，κωλικοίは現代の疝痛colicと完全に一致せず，むしろ結腸（κόλον/κῶλον）を含む腸の疾患一般をそう呼んでいると考えられる.

28）Garofalo（1988: 126–127）参照.

29）アレタイオスの急性病の原因と徴候に関する記述は最初の4章の欠損しているが，治療との記述の整合性から，おそらくこの部分に脳炎φρένιτις，嗜眠λήθαργος，枯渇症μαρασμός，卒中ἀποπληξίαがあったことが推定される.

30）ただし，吐血に関しては，パリ写本無名作者はαἱμοπτυικοί，アレタイオスはαἵματος ἀναγογήと異なる表現を用いている.

31）ここで「形をなす」と訳出したκυΐσκεταιはもともと妊娠・受胎を意味する言葉であり，ここでは比喩的に病気が形成されるという意味で特殊な使われ方をされている．なお，Hudeのテクストαἰσχρὸς κα.［sic.］σπίπονοςは明らかにαἰσχρὸς καὶ σπίπονοςの誤植である.

32）現代の糖尿病diabetesはこのギリシア語に由来する.

33）ガレーノス『疾患部位について（*Loc. Aff.*）』第1巻1章〔Kühn（1824）VIII 14. 14–17 = Gärtner 242. 9–11〕参照.

34）例えば，紀元前4–3世紀の解剖学者ヘーロピロスは筆尖（κάλαμος），十二指腸（δωδεκαδάκτυλος）静脈洞交会（ληνός）について記述したとされる．ヘーロピロスの解剖記述についてはVon Staden（1989: 138–241）参照.

35）ディオクレースの横隔膜にはφρήνではなく，同じく横隔膜を示すδιάφραγμαという別の言葉が使われている.

36）カエリウス『急性病と慢性病』第2巻33章〔Bendz（1990）250. 30〕にはソーラノスの『熱病について*De febribus*』という著作名が現れる.

37）アレタイオス『急性病と慢性病の原因と徴候』第2巻4章〔Hude（1958）23. 23–24. 29〕

38）ガレーノス『ヒッポクラテース「急性病の摂生法」注解』〔Kühn（1828）XV 585. 15–586. 2〕

39）ガレーノス『ヒッポクラテース「箴言」注解』〔Kühn

（1829）XVII B. 381. 16〕

40）ガレーノス『ヒッポクラテース「急性病の摂生法」注解』〔Kühn（1828）XV 787. 13–14〕

41）ただし，『ヒッポクラテース「箴言」注解』の別の箇所〔Kühn（1829）XVII B 490. 7–12〕では急性と超急性を区別せず，急性病として胸膜炎，肺周囲炎，咽頭炎の三つを挙げる．

42）各章で現れる熱病の記述の説明

43）ガレーノス『熱病の種類について』〔Kühn（1824）VII 274. 14–275. 3〕

44）同様の指摘について Yeo（2005: 437）参照.

45）ガレーノス『熱病の種類について』〔Kühn（1824）VII 334. 1–3〕

46）ガレーノス『分利について（*Cris.*）』〔Kühn（1825）IX. 641. 7–11 = Alexanderson（1967）126. 14–17〕なお，ガレーノスの区分では，燃炎熱はとりわけ三日熱と関係が深く，両者の唯一の違いは，燃炎熱では胆汁が血管の中に，三日熱では血管の外に集められることだとも述べられている．ガレーノス『震え，拍動，痙攣，悪寒について（*Trem. Palp.*）』〔Kühn（1824）VII 632. 12–15〕参照.

参考文献

Alexanderson B. Galenos ΠΕΡΙ ΚΡΙΣΕΩΝ Überlieferung und Text. Stockholm: Almquist & Wiksell; 1967.

Bendz G.（ed.）, Pape I.（tr.）. Caelius Aurelianus Teil I, Akute Krankenheiten I-III, Chroniche Krankenheiten I-II. Berlin: Akademie Verlag; 1990.

Bendz G.（ed.）, Pape I.（tr.）. Caelius Aurelianus Teil II, Chroniche Krankenheiten III-V, Indizes. Berlin: Akademie Verlag; 1993.

Byl S, Szafran W. La phrenitis dans le Corpus hippocratique Etude philologique et médicale. Vesalius. 1996; 2: 98–105.

Craik EM. Hippocrates Places in Man. Oxford: Clarendon Press; 1998.

Craik EM. The Hippocratic Corpus: Content and Context. Leiden: Routledge; 2015.

Deichgräber K.. Aretaeus von Kappadozien als medizinischer Schriftsteller: mit Anhang: Der kranke Gelehrte. Berlin: Akademie-Verlag; 1971.

Di Benedetto V. Il medico e la malattia: La scienza di Ippocrate. Turin: Giulio Eniaudi; 1986.

Drabkin EI. On acute disease and On chronic diseases, University of Chicago Press: Chicago; 1950.

Fuchs R. ‘Aus Themisons Werk über die acuten und chronischen Krankheiten’, Rheinisches Museum für Philologie. 1903; 58: 67–114.

Fukushima M. ‘Rudimentary Classification of Diseases in the Hippocratic Corpus’, Classical Studies. 2020; 25: 1–17.

Garofalo I. Anonymi Medici de Morbis Acutis et Chroniis. Leiden: Brill; 1997.

Garofalo I. Erasistrati Fragmenta. Pisa: Giardini; 1988.

Gärtner F. Galeni De locis affectis I–II. Berlin: De Gruyter Akademie Forschung; 2015.

Hude K. Aretaeus. 2nd edn. Berlin: Akademie Verlag; 1958.

Joly R. Hippocrate. Tome VI, 2e partie, Du régime des maladies aigües; Appendice ; De l’aliment; De l’usage des liquides. Paris: Les Belles Lettres; 1972.

Jones WHS. Hippocrates, with an English Translation, vol. 4, Nat. Hom., Salubr., Hum., Aph., Vict. 1–4. Cambridge MA: Harvard University Press; 1931.

Jouanna J. Hippocrate. Tome II, 2e partie, Airs, eaux, lieux. Paris: Les Belles Lettres; 1996.

Jouanna J. Hippocrates Tome II, 3e partie La Maladie Sacrée. Paris: Les Belles Lettres; 2003.

Jouanna J. Hippocrate. Tome III, 1re partie, Pronostic. Paris: Les Belles Lettres. 2013.

Kudlien F. Untersuchungen zu Aretaios von Kappadokien. Abhandlungen der Akademie der Wissenschaften und Literatur. 1963: 1145–1229.

Kudlien F. Der Beginn des medizinischen Denkens bei den Griechen, Zürich: Artemis Verlag; 1967.

Kühn CG. Claudii Galeni Opera omnia. 20 vols. Leipzig: Cnoblochii; 1821–33.

Littré É. Œuvres complètes d’Hippocrate: traduction nouvelle avec le texte grec en regard, collationné sur les manuscrits et toutes les éditions; accompagnée d’une introduction, de commentaires médicaux, de variantes et de notes philologiques; suivie d’une table générale des matières. 10 vols. Paris: J.–B. Baillière; 1839–61.

Mavroudis AD. ΑΡΧΙΓΕΝΗΣ ΦΙΛΙΠΠΟΥ ΑΠΑΜΕΥΣ. Athens: Academy of Athens; 2000.

McDonald GC. Concepts and treatments of phrenitis in ancient medicine. Newcastle: Newcastle University. Diss. 2009.

Nutton V. Ancient Medicine. 2nd edn. London: Routledge; 2013.

Nutton V. Galen A Thinking Doctor in Imperial Rome. London: Routledge; 2020.

Oberhelman S. Aretaeus of Cappadocia: On the chronology and the pneumatic physician of the first century AD. Aufstieg und Niedergang der Römischen Welt. 1994; 37（2）: 941–966.

Potter P. Hippocrates vol.6. Cambridge MA: Harvard University Press; 1988.

Potter P. Some principles of Hippocratic nosology. In: Potter P, Maloney G, and Desautels J（eds.）La Maladie et les malades dans la Collection Hippocratique. Les Édition du Sphinx: Quebec; 1990: 37–54.

Roselli A. Nosology. In: Pormann P（ed.）The Cambridge Companion to Hippocrates, Cambridge: Cambridge

University Press; 2018: 180–199.
Thumiger CA. History of the Mind and Mental Health in Classical Greek Medical Thought. Cambridge: Cambridge University Press; 2017.
Thumiger C, Singer PN（eds.）Mental Illness in Ancient Medicine: From Celsus to Paul of Aegina. Leiden: Brill; 2018.
Urso AM. Dall'autore al traduttore Studi sulle Passiones celeres e tardae di Celio Aureliano. Messina: Edas; 1997.
Von Staden H. Herophilus The Art of Medicine in Early Alexandria. Cambridge: Cambridge University Press; 1989.
Wittern 1974
Wellmann M. Herodots Werk ΠΕΡΙ ΤΩΝ ΟΞΕΩΝ ΚΑΙ ΧΡΟΝΙΩΝ ΝΟΣΗΜΑΤΩΝ. Hermes 1905; 40: 580–604.
Wellmann M. Zu Herodots Shcrift ΠΕΡΙ ΤΩΝ ΟΞΕΩΝ ΚΑΙ ΧΡΟΝΙΩΝ ΝΟΣΗΜΑΤΩΝ. Hermes 1913; 48: 141–143.
Yeo IS. Hippocrates in the Context of Galen: Galen's Commentary on the Classification of Fevers in Epidemics VI. In: Van der Eijk P（ed.）Hippocrates in Context. Leiden: Brill; 2005: 433–443.

On Conceptual Changes Regarding Diseases in Ancient Greece and Rome

Masayuki FUKUSHIMA

PhD Student (Classics), University of Edinburgh

This paper deals with the nosology in ancient medical texts, mainly concentrating on the classification of acute and chronic diseases, and demonstrates the origins of these categories and later receptions. Although a rudimentary classification of diseases can be found in the Hippocratic Corpus, it was not until Anonymus Parisinus and Aretaeus in the Roman period that the concept was clearly divided. However, the distinction between acute and chronic diseases was not explicit at that early stage, and there was some confusion about fevers, primarily due to the introduction of the new concept of *locus affectus* (the affected part of the body). The analysis also reveals that Galen's classification of fevers was based on a framework that differed from the traditional nosology.

Key words: Corpus Hippocraticum, Galen, Acute and chronic diseases, *Locus affectus*, Fever